

## 神丘公園隨想

片山周三九(神丘公園愛護会長)

水質や池に棲む動植物等の実態と、環境の変化に伴うそれらの変化など、貴会が当面する研究課題は、多種多様であろうことは、推測できる。私達愛護会の活動は、そのような高度のものではないが、15年間の活動実績は大変なものだと自負している。15年前と今日の状態では「月とスッポン」程の相違がある。神丘公園は、立派になったとか、いつもきれいにしてあるとか、よく言われる。昭和54年には、市長から感謝状を受けた。

名古屋は、「白い砂漠」だと言われるように、水に恵まれない都市で、加茂川をもつ京都市や、水の都と言われる大阪とは比較にならない。それなのに市内にあった多数の溜池は、埋め立てられて運動場や宅地と化してしまった。町村合併によって新たに名古屋市に編入された緑区や名東区には、農業用に造成された溜池が沢山あったのに、吾が名東区だけでもどれ程多くの溜池が埋め立てられて宅地と化したことか、古い資料と比較してみると判明することと思うが、私達愛護会の活動範囲ではない。

神丘公園内に、「デッチョウ池」がある。「デッチョウ」とは、旧高針方面の方言で、「高い処でのっぱった処」を意味するようだが、その文字さえさだかではない。私達は、27年前にこの地に移転してきた。当時は、池の水は澄んでいてキャンプするグループがあり、また、公園内には、50本の老松（樹齢120年を起えていると思われる。伊勢湾台風の被害を受け、その後毎年の台風で次々倒れ、更に松喰虫の被害もあり、現在数本を残すのみ）があり、樹間をフォークダンスとしてまわるグループもあった。池には、オニヤンマ、ギンヤンマも飛んでいたし、春蟬が鳴き、夏には、ニイニイ蟬がそして油蟬に変り晩夏と共にツクツクボウシにと移ったものだ。秋になれば、公園はもとより周辺まで鈴虫、松虫その他沢山の虫の音が聞かれ、鈴虫をつかまえたこともあった。現在は、春蟬の声はなく、ニイニイ蟬の声は僅か、油蟬の鳴く頃、何故か熊蟬がかしましくなった。ツクツクボウシは、現在も鳴く。この声を聞くと宿題に追われた少年の頃の夏休みを思い出す。（名古屋地方には、ミンミン蟬や日暮しは、もとからいない。）この池では、もはやオニヤンマもギンヤンマも絶対に見ることはできない。秋から冬にかけて目白数十羽、鷺、類白、アオジ等数羽、四十雀十数羽、公園から吾が家や近所の庭にも訪れたものだが、現在では、その数も二～三割に過ぎない。人が段々に住み家を広げ、自然をこわし、動植物を駆逐して行く。自然を守り、動植物の種の保存に努めないと大変なことになる。佐渡のトキがその例であろう。

デッチョウ池に入れてはいけない「ブルーギル」、「ブラックバス」、「雷魚」などを入れる者がいる。魚類の生態系をこわしてしまう。汚水を流す者、鯉に釣針をかける不心得者、ゴミや空缶を捨てる者、名古屋市民のモラルが問われよう。交通マナーの悪さも周知の通り、何とかしなければ「国際都市名古屋」の名が泣く。

貴会の今後の格段の御努力とその成果に大いに期待したい。御健闘を祈る。